

目 次

□湯原元一先生御講話	田邊 尙雄
□日本音楽の發達につきて	
□病みて	尾上 柴舟
□研 究	
國歌に就て	
戦争と教育	
□滿鮮旅行記	
□理氣之説	
□大正六年度に於ける文壇の諸研究	
□會計報告	

湯原元一先生御講話

(於大正七年二月十九日例會)

題は別に設けないが、教育學の日本に入つた由來について、一種の回顧談をする。多くは經驗の範圍で言ふので悉く書類に就て調べたのでは無いから、或は間違つてゐるかも知れない。今更なる品評を以て、さてこの學校は教育學にはよほ縁故が深い。前學校長高嶺氏は日本に於ける教育學の開祖である。始めて亞米利加に教育學を學びに行つた人である。その「教育新論」は多くはジョホノットの本によつて出來たもので四冊になつてゐた。私は旅行中、熊本の山鹿温泉の本屋でこれを見たが、これが私が教育學をして見ようと思ひ立つに至つた原因の一つである。一時世に普及して、このお蔭で教育學界に出た人が多いと思ふ。次に本校の教頭であつた理學博士村岡半一氏が教育的理學を研究する爲に獨逸に留學した。あまり聞えて居らぬがこの人は「平民學校論略」を出してゐる。よほ苦心して書いたもので、ホーク、スシユレーを平民と譯したのである。獨逸のケールの本を譯したものである。ケールは學者で頭もよく、筋が通つてゐて原文も文章がいゝ。惜しむらくは當時英語が流行して獨逸語があまり行はれてゐなかつた故か讀まれなかつたが、今日でも参考となるべきものである。

本校の前身なる東京女學校の校長であつた野瀬榮(福島縣師範學校時代に見出されて亞米利加に行つた)は教育學の著者として名高い。非常に夥しい新教育學が色々の形をとつて著された。有名なるラインの教育學